



社殿遺構から見る木割の影響について —下山大工、松木運四郎—

K02069 寺本理恵

I はじめに

I-1 研究の背景

木割は木砕といわれ、始めは部材の木取りを目的とする技術であった。大工それぞれの技術によって建てられてきた寺社建築であったが、中世になると、建築を一つの寸法基準で定めようとする考え方が生まれる。垂木の幅と成の和を一枝として単位化し、柱間を基準に各部材の寸法を比例関係によって決定していく設計システム、木割の成立である。古代より部分的には存在していたが、体系的に完成したのは桃山時代だと考えられる。このように大工書が成立した背景には、室町時代に大工職が世襲されるようになり、大工書を設計手引きとして扱ったことが大きな要因と考えられている。大工書は、一定の造形マニュアルとして機能し、数多くの木版本が刊行されることで、建築技術の急速な普及に役立ってきた。しかし、時代を経るに従い単なる形式化してしまい、新たな建築の創造を制約し、画一的な建築を残すことにつながった。

I-2 研究の目的

松木家に伝わる社殿に関する『新撰雛形』『大工雛形』や、同じ下山大工による『匠家雛形増補初心傳』などの大工書は、当時の大工の設計意図を知るためには重要な手掛りである。本研究では、下山大工松木運四郎が手がけた社殿の遺構を実測調査し、大工書との比較検討により、木割の及ぼした影響を明らかにする。なお、同時期に活躍し、別家系であった松木左内が手がけた社殿については、同時期の下山地区の社殿として参考に用いる。

I-3 研究方法

松木運四郎と松木左内による神社本殿の遺構を研究対象とする。以下にその方法と手順を示す。

- 『新撰雛形』『大工雛形』の解説。補助資料として『匠明』社記集を用いて木割シートを作成。
- 対象の神社本殿の実測調査及び、写真撮影を行う。

- 調査した神社の図面作成、建築形式をまとめる。実測値は枝になおし、大工書との比較に用いる。
- 再度大工書を解説、『匠家雛形増補初心傳』を含め内容把握を行う。
- 調査した遺構と大工書を比較し影響関係を考察する。
- 『大工雛形』『匠家雛形増補初心傳』については3次元CADを立ち上げ、遺構との比較に用いる。

II 下山大工について

下山大工は戦国大名武田氏の武将、穴山梅雪が下山(現在の身延町下山)に城を築き、その城下に大工を集住させたことから歴史上に姿を現したと考えられている。後に、組織内派閥抗争や甲府町方大工との縄張り争いなどを経て、甲斐国を中心とした、優れた大工集団となった。農地の少ない河内地方では、日蓮宗総本山が近くにあり多くの寺院が建てられたことや、身延には山が多く、建築に使えるよい木材がたくさん手に入ったことなども後押しし、大工職が盛んになる。幕末には建築技術はもとより、彫刻の作品においても素晴らしい技術を駆使し、近世の社寺建築の工匠として全国的にもその名は知れ渡ることとなる。

III 調査神社

「山梨県棟札調査報告書」より、棟札が確認できた松木運四郎の携わった社殿の遺構は以下のものである。

- ・若宮八幡神社御殿 文政十一年棟札 下山 松木運四郎
 - ・八幡神社御殿 天保十四年棟札 棟梁 下山荒町 松木運四郎宣絹
 - ・諏訪神社本殿 文政十二年造替棟札 大工下山村 松本運四郎宣絹
 - ・諏訪神社大大神楽 寛政十年祈祷札 松本運四郎宣絹
- 今回はこの中から若宮八幡神社と八幡神社について調査を行う。また、同時期に活躍していた松木左内の手がけた2棟の社殿の遺構についても調査を行うものとする。

表1 調査対象の神社

建築名	建立年	建築形式	大工
若宮八幡神社御殿 (身延町西島)	天保2年 (1831)棟札	一間社流造	石川七郎左衛門 松木運四郎、他
薬明神社宝殿 (身延町八日市場)	天保11年 (1840)棟札	一間社流造	佐野喜内 松木左内
八幡神社御殿 (富士河口湖町西湖)	天保14年 (1843)棟札	一間社流造	松木運四郎
飛川神社本殿 (増穂町最勝寺)	文久4年 (1864)棟札	一間社入母屋造	松木左内

IV 石川七郎左衛門と松木運四郎の関わり

図2の若宮八幡神社御殿では、文政11年(1828)棟札で棟梁石川七郎左衛門、匠連明の項の中に松木運四郎の名を見つけることが出来る。その後、天保2年(1831)の現存遺構の上棟棟札には彫工として石川七郎左衛門、第四大工として松木運四郎が関わっていたことがわかる。また、石川七郎左衛門と松木運四郎は両者とも諏訪神社にも携わっていたことが確認できる。

石川七郎左衛門は明和6年(1769)に生まれ、中世以降の伝統を誇る下山大工に属していた。彫刻の名手としても活躍し、巧妙な彫刻を残している。また、彼は文化9年(1812)43歳の時、『匠家雛形増補初心傳』を著した。同書は、構造・意匠の基本を説明したものであり、その後、下山大工の活躍の基礎となった。

今回、松木運四郎の設計意図を模索することを目的としているが、それを追及するにあたって、石川七郎左衛門の影響は無視できないのではないかと考えられる。そこで、松木家で実際に使われていたと思われる大工書『新撰雛形』『大工雛形』に加え、石川七郎左衛門が著した『匠家雛形増補初心傳』についても、検討を行う。

V 調査神社本殿の特徴

V-1 平面構成

松木運四郎、松木左内によって手がけられた神社4棟の平面図を比べると、八幡神社、若宮八幡神社がほぼ同じ形であることがわかる。飛川神社は脇障子の位置が他とは異なり、後ろ斜めに取り付けられている。また、この4棟の中ではただ一つ、表間より妻方向が広くとられた形式となっている。薬明神社は脇障子後ろに回り縁がなく、さらに表間が妻の間に比べ比較的広くとられ、全体的に他のものと違いが見られる。扉の位置による平面形式の違いでは若宮八幡神社と飛川神社、八幡神社と薬明神社でわかることが出来る。前者は梁行方向を内陣、外陣と分けて扉が取り付けられている。

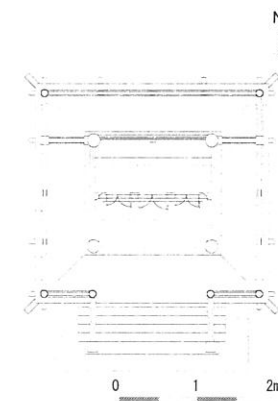


図1 八幡神社本殿 (松木運四郎 棟梁大工)

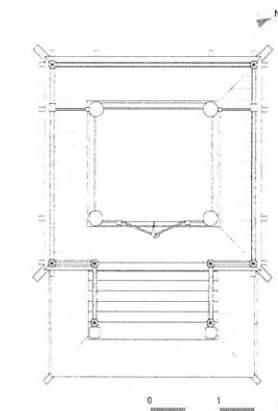


図2 若宮八幡神社本殿 (石川七郎左衛門 棟梁

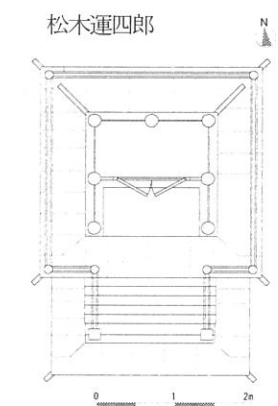


図3 飛川神社本殿 (松木左内 棟梁大工)

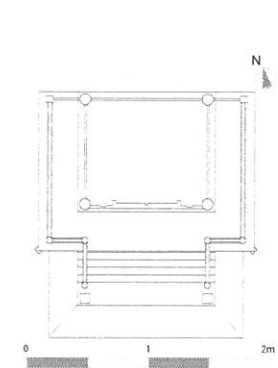


図4 薬明神社本殿 (松木左内 脇棟梁大工)

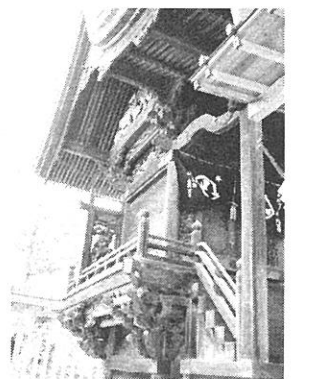
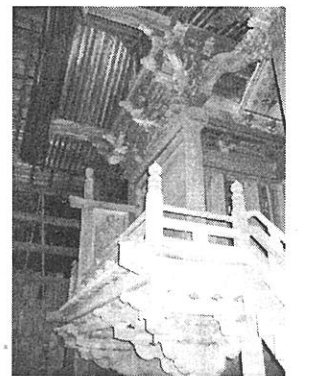


表2 大工書・本殿遺構の木割値(枝)

	平内正信	小暮甚七		石川七郎左衛門	松木運四郎		松木左内	
建築名	『匠明』社記集	『新撰雛形』	『大工雛形』	『増補初心傳』	八幡神社	若宮八幡神社	飛川神社	葉明神社
建築形式	一間社流造	一間社流造	一間社向造	一間社流造	一間社流造	一間社流造	一間社入母屋造	一間社流造
建立年	1608年	1758年	1717年	1812年	1843年	1831年	1864年	1840年
表間	22	20	22	22	20	22	20	24
表間(尺)	—	—	—	7.92	5.05	5.64	4.85	3.96
一枝寸法(寸)	—	—	—	3.60	2.52	2.57	0.24	0.17
柱太さ	2.20	2.00	2.20	2.50	2.09	2.44	2.07	1.82
/柱間	0.10	0.10	0.10	0.11	0.10	0.11	0.10	0.08
GL〜柱上端高さ	33.88		25.23	44.21	37.56	45.28	39.94	33.68
/柱間	15.4		11.5	17.68	18.8	20.6	20.0	14.0
組物(手先)	三斗組	三斗組	三斗組	出組	二手先	二手先	三手先	三手先
妻架構(妻飾り)	冢扱首	冢扱首	大瓶束	虹梁龕股	大瓶束	彫刻	木連格子	大瓶束
大床までの段数	8段	8段	8段	6段	8段	8段	8段	8段
内法長押成	1.32	1.20	1.32	2.00	1.57	1.75	1.43	1.20
頭貫成	1.54	1.20	1.54	2.00	1.61	2.21	1.97	1.78
向拝柱太さ	1.76	1.60	1.76	2.00	1.70	1.99	1.97	1.64
/柱太さ	0.80	0.80	0.80	0.80	0.81	0.82	0.95	0.90
大斗幅	2.20		2.20	2.44	2.44	2.34	2.45	1.82
斗尻	1.32		1.40	1.47	1.48	1.44	1.56	1.24
大斗成	1.32		1.20	1.50	1.42	1.35	1.43	1.20
大斗繰	0.53		0.48	0.60	0.59	0.53	0.54	0.50
大斗成/大斗幅	0.60		0.55	0.61	0.58	0.58	0.58	0.66
大斗繰/大斗成	0.40		0.40	0.40	0.42	0.39	0.38	0.42
大斗斗尻/大斗幅	0.60		0.64	0.60	0.61	0.62	0.64	0.68
肘木幅	0.73		0.73	0.83	0.80	0.77	0.82	0.66
肘木成	0.88		0.88	1.00	0.94	0.94	0.95	0.76
肘木幅/柱太さ	0.30		0.30	0.33	0.38	0.32	0.40	0.36
肘木成/肘木幅	1.20		1.20	1.20	1.18	1.22	1.16	1.15
巻斗幅	1.44		1.46	1.50	1.44	1.48	1.50	1.24
巻斗斗尻	0.86		0.93	0.90	0.88	0.90	0.88	0.68
巻斗成	0.88		0.79	0.90	0.94	0.84	0.88	0.80
巻斗繰	0.35		0.32	0.36	0.40	0.39	0.34	0.40
巻斗成/巻斗幅	0.61		0.54	0.60	0.65	0.57	0.59	0.65
巻斗繰/巻斗成	0.40		0.41	0.40	0.43	0.46	0.39	0.50
巻斗斗尻/巻斗幅	0.60		0.64	0.60	0.61	0.61	0.59	0.55
丸桁成	1.32			2.22	1.02	2.77	2.24	2.24
丸桁幅	1.00		1.10	1.44	1.54	1.26	1.43	1.22
地樋幅	0.44		0.46	0.50	0.50	0.45	0.54	0.40
地樋成	0.53		0.55	0.60	0.61	0.55	0.61	0.46
地樋幅+1枝	1.44		1.46	1.50	1.50	1.45	1.54	1.40
地樋幅/柱太さ	0.20		0.21	0.20	0.24	0.18	0.26	0.22
地樋勾配	4寸勾配	3.2寸勾配	3.9寸勾配	5.4寸勾配	4.9寸勾配	5.2寸勾配	3.2寸勾配	5.3寸勾配

V-2 大工書内容の比較

『新撰雛形』: 始めに表間の枝数を定め、その寸算を柱径とする。比例関係により長押寸法、垂木勾配などが決定されるが組物や高欄などによる記載はない。

『大工雛形』: 始めに表間の枝数を定め、その寸算を柱径とし、柱の比例関係によって、高さ、部材の寸法、造作に至るまで割り出されている。

『匠家雛形増補初心傳』: 枝数表記と実寸表記が併記さ

れ、まず一枝寸法を定め、その倍数で柱間を、垂木数と木間数で柱太さを決定する設計手法が記されている。

ここで大工書の枝割を見ると、『匠家雛形増補初心傳』は『大工雛形』に比べ柱が太く、長押内法、大床高さなどが明らかに高い。全体的にも部材の成、幅ともに大きくなっている。また、垂木勾配は急勾配になってきたことがわかる。

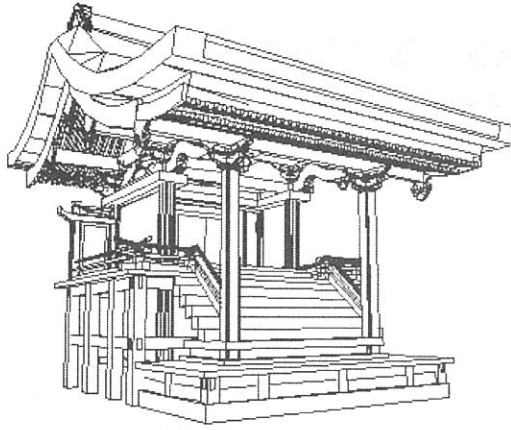


図5『大工雛形』の復元図

VI 考察

VI-1 社殿遺構と大工書の比較

研究対象神社の中では、全体的に大工書に類似しているものはなかった。しかし、部分的に使用していたのではないかと認められる点はいくつかあったと言える。

『匠家雛形増補初心傳』の著者である石川七郎左衛門が棟梁であった若宮八幡神社は、柱太さの割付が『匠家雛形増補初心傳』に近似したものである。しかし、他の部材については同大工書の影響をみることは出来ず、地垂木について言えば『大工雛形』と同じ枝数をとっている。若宮八幡神社は地域大工との合作であった為、棟梁であってもすべて自由に設計を進める事は出来なかったのではないか。いかに若宮八幡神社が地域に根強く支援されて造られたのかを考えさせられる結果である。

運四郎が棟梁を勤めた八幡神社を見てみると、大工書に比べ表間が狭くなっているものの、柱の割付は『大工雛形』と同じ、表間×1/10から求められたものであると考えられる。しかし、大斗、肘木、地垂木などの部材については『匠家雛形増補初心傳』とほぼ同じ枝数をとっている。また、多くの部材で若宮八幡神社と近似した枝割がみられる。運四郎は棟梁としてこの社殿の設計をするにあたり、松木家に伝わる大工書を手だてとしながらも、一緒に仕事をしてきた大工の技術をはるかに大きく反映させたのである。

『新撰雛形』については、柱の割付以外では他の大工書とも異なり、対象神社と比べても木割の影響は少ない。

VI-2 社殿遺構と3次元CADの比較

『大工雛形』と調査神社の写真を比べると明らかに外観的印象は異なっている。全体的には垂直方向に低く、屋根勾配がゆるいため、ずっしりとした感じを受ける。

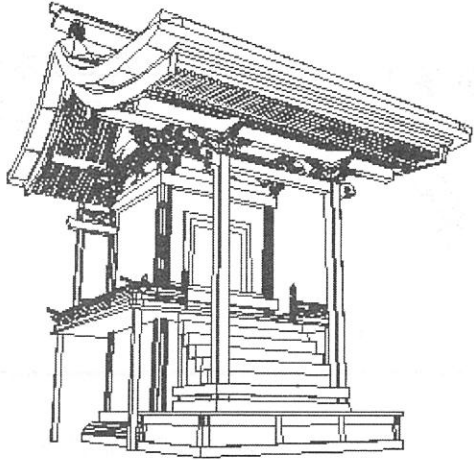


図6『匠家雛形増補初心傳』の復元図

『匠家雛形増補初心傳』は八幡神社や若宮八幡神社と比較的プロポーションが似ている。組物、高欄、妻飾りなどの造作はシンプルであるが、外観的印象の差は少ない。

VI-3 下山地区の神社について

同時期に活躍していた松木左内による社殿の遺構から、飛川神社では枝割が八幡神社に近い値をとっていることがわかる。下山大工にとって『匠家雛形増補初心傳』が神社建築において重要な基礎本となって機能していたことがうかがえる。

VII まとめ

本研究では、松木運四郎の神社本殿の遺構から運四郎の設計理論について考えてきた。八幡神社と若宮八幡神社は形態、木割ともにとても近いものであった。よって運四郎は、忠実に先輩大工である石川七郎左衛門の技術を受け継ぎ八幡神社を造ったと考えられる。松木家に伝わる、『新撰雛形』『大工雛形』を補助として使いながらも、実際に一緒に仕事をした下山大工、石川七郎左衛門が残した『匠家雛形増補初心傳』を主に参考に用いていたのではないか。しかし、多くの部材設計で大工書を参考にしながらも、決して完全に従うものではない。彫刻においても名を残した下山大工、松木運四郎だけに装飾性に富んだものであり、時代的な特徴や地域性をもった社殿を後世に残したのである。

参考文献

・松尾圭三「中近世社殿遺構における木割の変遷および『匠明』等大工書との比較研究」2003年 芝浦工業大学修士論文

・桑原麻樹子、東郷真木「近世大工書『匠家雛形増補初心傳』に関する研究」

2001年 芝浦工業大学卒業論文

・山梨県教育委員会「山梨県棟札調査報告書」各巻 H9 山梨県史資料叢書

H17 山梨県史資料叢書